

一 はじめに

藤原清輔は『古今和歌集』を書写校訂している。清輔本と通称されるそれらの転写本には、欄外や本文の傍らに大量の勘物書き込まれている。歌数、出典、校合本文、作者注など、その性格は多岐にわたるが、この勘物は『奥義抄』や『袋草子』などの歌学書に展開される清輔の『古今和歌集』研究と連動しており、その写本を清輔本たらしめる要素となっている。したがって、清輔本の転写本は、本文だけでなく勘物も転記されていると期待されるのだが、実際は、清輔本の転写本であることが明らかでありながら、勘物のないものも少なからず存する。

勘物のない清輔本の転写本については、勘物はないが本文は清輔本系統に属する、といった視点からの紹介がなされてきたが、ではなぜ書写者は勘物を写さなかったのかと

いう点については、特に論じられてこなかったように思う。勘物が清輔本として欠くべからざる要素である以上、勘物を省略する行為は、清輔本の受容を考えるうえで看過できない書写態度と考える。本稿は、清輔本でありながら勘物をもたない書写本、特に古筆切の存在に着目し、書写者が勘物を省略した理由と、そこから見られる清輔本の受容の一端について検討することを目的とする。